

徳満医師(十和田中央病院) コロナ禍データ用い論文

新型コロナウイルス感染者のうち、軽症の人はその後の恐怖心が未感染者に比べて低く、重症だった人は恐怖心が増幅する。十和田市立中央病院メンタルヘルス科長の徳満敬大医師のグループが、大規模アンケート調査を基に、そんな論文を発表した。新型コロナの感染症法上

の分類が変わり、社会が日常を取り戻した一方、感染のリスクはまだまだ身近に存在しており、一定の警戒は必要な状況。恐怖心の差は、個人の感染防止対策の違いにつながる可能性があり、徳満医師は「皆が基本の感染対策に立ち返る必要がある」と警鐘を鳴らす。(金濱千優希)

恐怖心症状の強弱で差

重症者増幅、軽症者は未感染者より低く

調査では、22年時点と23年時点の新型コロナウイルスに対する恐怖尺度を比較した。論文によると、22年よりも23年の方が集団全体の恐怖心は低下。未知の感染症として恐れられていた流行初期〜中期に比べて、感染予防措置の周知が図られたり、医療体制の安定、ワクチン接種によって、時間とともに恐怖心が和らいだりした可能性が考えられるという。

感染者が増えたことで、集団内では恐怖心に大きな差も

2015年から毎年実施されている大規模インターネット調査(JASTIS研究)のデータを用い、徳満医師が解析した。参加した約2万人の回答から、日本人の一般的な集団の中で、新型コロナウイルスの恐怖尺度の変化に影響を与える要素を解明し、恐怖心の推移を推察することが今回の目的。



徳満敬大医師

生まれた。酸素療法を必要とする、重症の新型コロナウイルスを患った人は1年前に比べて恐怖心が増幅。命の危険にさらされたことで、長期的なトラウマ(心的外傷)を抱える可能性もあるため、退院後は精神的なサポートも必要と指摘している。

一方、軽症で済んだ人は、その後の恐怖心が未感染者の人よりも小さくなる予測される結果に。実験が恐怖に対する抵抗力になっているとみられる。

この調査結果から懸念材料として考えられるのが、今後新型コロナウイルスへの感染防止対策だ。恐怖心の低下で感染対策がおろそかになる人が増えれば、感染拡大を食い止められず、重症化リスクの高い人への感染につながる恐れもあるという。

徳満医師は「必要以上に怖がったり、軽視したりせずに『正しく恐れてほしい』と強調。今後、感染拡大によって社会不安が増強されるような事態になった場合でも『真偽不明であったり、自身に都合の良い情報に流されたりするのはなく、(厚労省など)確かな情報源にアクセスし、基本の感染対策に取り組むことが重要』と呼びかける。

策だ。恐怖心の低下で感染対策がおろそかになる人が増えれば、感染拡大を食い止められず、重症化リスクの高い人への感染につながる恐れもあるという。

徳満医師は「必要以上に怖がったり、軽視したりせずに『正しく恐れてほしい』と強調。今後、感染拡大によって社会不安が増強されるような事態になった場合でも『真偽不明であったり、自身に都合の良い情報に流されたりするのはなく、(厚労省など)確かな情報源にアクセスし、基本の感染対策に取り組むことが重要』と呼びかける。